

文学の曇天

豊島与志雄

青空文庫

近頃、文壇に懐古的気分が起つてきているのが眼につく。新聞雑誌の上に、明治時代の、或は大正初年頃の、さまざまの追憶や思い出が数多く掲載されているようである。

この懐古的気分は、どこから由来したのであろうか。

現在の吾国の文学は、その伝統が明治時代から初まったといつても、過言ではあるまい。少くとも、国民性に根ざす情意の色合を別にして、思惟の形体や表現の形式については、そう云えるであらう。吾々は半ば西洋流に物を考えるようになってしまった、というその半ばが、文学に於いてはまさしく半分だけの重要さを持つものであつて、それを引去つては、文学は不具になる。

この伝統の発生時代から、相当の年月——振返って眺めるのに適宜な視距離を得るだけの年月——が経過した。そのために、明治時代の再認識が企図せられ、明治文化の研究が進められるのは、当然のことであろう。

然しながら、現在の懐古的気分は、そうした真面目な研究心の裏付を持つことが、甚だ少い。文芸を取扱う新聞雑誌に発表されてる多くの文章、追憶や思い出は、単なる昔話に終わってるのが大多数で、批判的要素の欠乏が甚だしい。全くそれは単に懐古的な気分から生れた過去のお話に過ぎない。ごく少数のものを除いて、幾多の文章や、談話会の記事など、例はいくらかも挙げる事が出来る。

文壇に於けるこの懐古的気分には、種々の誘因があるかも知れない。「明治文化研究」其他の真面目な研究団体からの気運の波及、明治維新以後の史実に手をつけ初めた大衆文学からの影響、実話物流行の一つの派生的な現われ、或は、近頃の名文章たる谷崎潤一郎氏の「若き日のことども」などからの影響、其他種々のものが数えられるであろう。

然し、それらと全く性質の異つた一つの誘因を、私は認める。そしてそれがこの小文の主題でもある。

懐古的気分から生れた追憶や思い出、過古に対する批判が欠乏し、未来に対する進展力が更に無い、単なる昔話、そういうものが頻繁に現れるということは、どこかに、一種の停滞があること

を暗示する。どこかに、一種の淀みがあることを思わせる。之を逆に云えば、何等かの停滞や淀みから、懐古的な気分が生じ、批判の乏しい進展力のない昔話が栄えるのである。

こうした停滞や淀みは、文学の転向期には往々ありがちのものであるが、現在のそれは、更に陰鬱なものを思わせる。固より、一方には、作家等の側に於ける無気力もあるかも知れないし、他方には、文学として製造された短篇作品の過剰から来る、文学の魅力の喪失もあるかも知れない。然しそれよりも、他の陰鬱なもの、日の光を遮る雲のようなもの、云いかえれば文学全般の曇天を、更に思わせるのである。

文学の曇天、このことを云う前に、これを分りやすくするため

に、この頃新たに自由主義ということが唱えだされた所以を考え
てみるのも、無駄ではあるまい。

*

自由主義は、云うまでもなく、一の態度であり、一の心構えで
あつて、政策ではない。それゆえ一定の実践的方面への推進力は
持たない。

それは、個人の人格を尊重し主張する。思想の自由を主張し、
言論の自由を主張し、時としては行動の自由までも主張する。そ
してそれ相当の熱情さえも持っている。然しながら、社会生活に
対して、斯くあらねばならないという具体的実践的規範を提出し
はしない。

随つて、自由主義の唱導は、何等かの権力的統制の過重を思わせる。實際、何等かの権力的統制の過重なしには、自由主義は唱導される理由を持たないであろう。

然るに、この自由主義はそれ独特の正義観から、或る機縁を与えらるれば、火となつて燃え上る可能性を持つている。自由主義の発生地は、社会のインテリ層である。インテリ層は、最も早く火を引き易い可燃層である。持続的な実行力は弱いが、一時的な爆発力は強い。フランスの大革命も、ロシアの革命も、また近くは我国の明治維新も、そのことを吾々に示して呉れた。そしてこのインテリ層が火を引き初めるや、その自由主義はもはや自由主義ではなくなる。一躍反対物へ転化してしまふ。

自由主義のインテリ層が、如何なる機会に火を引くか、そして如何なる火を引くか、それが問題なのであつて、統制者側の最大の関心注意は、そこにある筈である。

一の権力的統制が、自己を強度に確立しようとする時、危険なインテリ層の火を、或は一挙に踏みつぶすこともあるうし、或は長くぶすぶすとくすぶらせることによつて、やがて死灰になすの方策を取ることもあろう。前者を霸道とすれば、後者は王道である。だがいづれも、万一の危険は覚悟しなければならぬ。そこで、最も安全な道を選ぶには、インテリ層が火を引かない前に、その自由主義をして、いつまでも自由主義で止まらしむることである。云いかえれば、何等の集団的な根拠をも持たしめず、何等

の階級的な色彩をも帯ばしめず、何等の実践的な目的意識をも懐かしめないことである。

さて、こういう風に遊離した状態に置かれる自由主義は、或る營養不良的な陰鬱さを、その相貌の上に漂わせる。營養不良は、食物の不足と空気の不足と、両方から来る。実践的動力の不足は食物の不足であり、権力的統制から来る拘束は空気の不足である。近頃吾国に起つてきた自由主義には、右のような陰鬱さが觀取されないだろうか。少くとも、この自由主義には朗かさが乏しい。自由主義は、その本来の氣質からして、朗かであるべきである。やがて勃興しようとする氣運の先驅者たる澆刺さを、内に萌芽しているべきである。それが、陰鬱であるという現状は、たとい

ールジョアジの自由主義であるとしても、余りに惨めである。

この自由主義の陰鬱さと、前述の文学の曇天とは、共通のものを持っている。それは同一のものから来る投影の、二つの現れに過ぎない。即ち、何物かが空を蔽い日の光を遮って、大きな影をなげかけ、その影の中で、文学は未来に対する進展力を阻まれ、自由主義は食物と空気との摂取を妨げられている。

そうした影を投じてる本体は何か。それは、逆に辿って、強度の権力的統制であると云えるだろう。然し現在の権力的統制は、注目すべき特殊な相貌を呈しているようである。

*

権力的統制は、権力を掌握してゐる主体が青年期もしくは壮年期

にある場合に於いてのみ、力と生命と意義とを持つ。然しその主体が、老衰期にはいり、没落に近づくにつれて、その権力的統制には頑迷な老人に見らるるような、焦慮と剛直とが不思議に混和した一種のファツシヨ的傾向を帯びる。そしてこういう傾向こそ、凡てのものを陰鬱な気分で塗りつぶす。

五・一五事件は、吾国のファシズムの一つの現れだと云われるが、私はそう思わない。あの事件あつて、別種のファツシヨ的傾向が益々濃厚になつたのではないか。また、所謂強力内閣が出現しても、吾国の生命線と云わるる満蒙の地が確保されても、社会的雰囲気は妙に陰鬱になるばかりではないか。これは単に、資本主義の行き詰りや軍部の跳梁などだけでは、説明しつくされない。

その根本のところは、社会的な経済的なまた政治的な老衰が、老衰につきものの動脈硬化を来し、その動脈硬化がこの場合には生命硬化となり、統制の側に於ける焦慮と剛直とを伴って、ファツシヨ的傾向となつて現れ、それが全面的に進出してきたこと、そのことではないだろうか。

私は今茲に、政治や社会を論ずるつもりでは毛頭ない。然しながら、文学の曇天を感じるが故に、その曇天の由つて来るところを探つてゆくと、右のようなことを考えざるを得ないのである。

そこで、文学を曇天より救うには、右のような生命硬化から来るファツシヨ的傾向と絶縁して、それから来る陰鬱な影を受けない日向へ、文学を持出すより外に、方法はない。

このことは果して可能であろうか。可能ならしむるためには、現実に対する特種な把握の仕方が必要であろう。そして、社会的存在のみが吾々の意識を決定する唯一のものであるとするならば、問題は簡単になると共に深刻になる。また、文学者の率直赤裸な意識に、或る種の進展性と飛躍性を認むるならば、問題はわりに手近なものとなると共に複雑になる。だがいずれにしても、憂鬱な自由主義者たるだけでは足りないだろう。

晴天の日には南の窓を閉め、曇天の日を喜び、雨の日を歓迎して、そして仕事をするようなことは、文学を益々曇天ならしむるばかりである。——とこう云うのは、勿論比喩的な云い方であつて、作者には各人各様の仕事癖があらうけれど、作者としての心

境が右のようなものである限りは、文学は決して日向に出るものではない。そして茲で云いたいのは、文学の前方に立ちはだかつて大きな影を投じてるものを、つきぬけるか打ち倒すかするだけの意欲を、文学者自身も持つべきであるということである。そうしてはじめて、文学にも澆刺とした息吹きがこもってくるであろう。

そして文学に於いて問題となるのは、この意欲の表現の仕方だけである。このことについて、蛇足ながら——というのは、文学を文学たらしむるために——一言つけ加える必要がある。

*

文芸のために生涯を捧げて黙々と歩み続ける人々の努力には、

真に涙ぐましいものがある。そして、よい作品を書くということだけが、彼等の目的の凡てであつて、他事は敢て問わないようにも見えるばかりでなく、例えばバルザックやドストエフスキーのような作家にあつては、時として馬車馬のように駆り立てられ、ただ書かんがために筆を走らせたような点さえ見受けられる。

然しながら、そういう場合に於いても、彼等の精神の集中力は、作品の中にじかに彼等の魂を乗り移らして、内心の翹望や憤激や情熱をにじみ出させる。前例を追つて云えば、世態風俗の撮影のための描写とも見えるバルザックの或る種の作品や、心理の解剖説明のための叙述とも見えるドストエフスキーの或る種の作品にも、なお、作者の生活意欲を離れては説明出来ないような、特殊

な進展力を人に伝える熱量を含んでることがある。

かかる熱量の移植は、文学職工としての技術から来るのではなくて、直接にその「人」から来る。この間の秘密を、アンドレ・ジイドは他事に託して云っている。――

文学に於いて、自己を怖れるとは、何というばかげたことであろう。自己を語ることに、自己に関心を持つこと、自己を示すことを、怖れるとは。（フロアベルの苦難の行の必要は、彼に、この偽れる悲むべき効果を考え出させたのである。）

パスカルは、モンテーニュに、己を語ると云って叱責した。そしてそれを滑稽な痒がりだとした。しかし、彼自ら、自分

の意に反して、そういうことをした時ほど、彼が偉大であったことはない。彼がこう書くとする。「キリストは人のために自分の血を流した。」と。その彼の言葉は、何等の効果をもち持たずして落ちる。だが、「私は」という言葉がはいつて来るや否や、すべては生きてくる。そしてこの神が彼の許に来るならば、彼を君僕で呼ぶだろう。「僕は、君のために、こんな血を流した。」と。この特別の血を、君のために、ブレーズ・パスカルよ……。そうすれば、我々の誰でもが、この讃うべき君僕の言葉使いに、己が理解されていることを感ずるのである。

この君僕の言葉使いは、文学の上では直接には為されない。然しながら、そういう言葉使いが為されてるかどうかは、読者の胸に伝わるものである。そしてそれによつて読者は、作者の意欲の性質を感じるのである。

これは文学の深奥な道である。然し、感性に訴える、この道は、理性に訴える論説や説教の道よりも、案外短距離である。

これだけの蛇足を添えて、さて本旨に戻つて——文学の曇天は、文学を益々踳踏させ、衰微させるだけである。それ故、その雲を吹き払い、影を消散せしむるだけの意欲を、文学自身も持たなければならぬだろう。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文学の曇天

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>